

「こっちだよ」廃坑の  
闇で故意に迷わされた  
大学院生がガイドにし  
か頼れないカントボー  
イ

「——う、あ……っ♡」

湿った岩肌が頬に張りつく。冷たい。けれど背中に密着した身体だけが異常に熱い。

剣持さんの——ツアーガイドの、丸太みたいな腕が腰を捕まえている。

「やっ……離して、ください……っ」

掠れた声が坑道の壁を跳ねて、四方から自分に降り注いだ。

狭い。暗い。自分のヘッドライトはもう点かない。剣持さんの額の光だけが、黒い壁を楕円に切り取っている。

「——お前、カントボーイだろ」

耳朶を唇が掠めた。低い声。断定。

心臓が凍った。

「受付の健康シート。婦人科通院って書いてあった。男である欄に丸をつけるのは——お前みたいな身体のヤツだけだ」

「ちがっ……あれは……っ」

「嘘つくな。手が震えてる」

……本当だった。壁に押しあてた指先が、がたがたと小刻みに揺れている。

ヘルメットの顎紐がゆるく振れるのも分かる。でもそれ以上に、頭の奥がぐらぐらしていた。バレた。この暗闇の底で、たった二人きりの空間で——僕の秘密が。

「離してくだ——」

「離したら？」

剣持さんの声が、笑っていた。

「ここから一人で出られるか？ 携帯は圏外。道も分からねえ。  
俺のライトがなきゃ、一步も歩けないだろ」

喉が詰まった。反論できない。

「いい子にしてたら、地上まで連れてってやるよ」

ベルトの金具が弾ける音がした。カチ、と。

坑道の静寂の中で、その金属音だけが異様に響く。

「やめっ……やだっ、やめてくだ——」

「暴れるな。泥に滑って頭打つぞ」

ジーンズが引き下ろされる。膝の裏まで一気に。坑道の湿気をたっぷり含んだ冷気が、剥き出しの太腿にまとわりついた。

「……レディースのパンツ穿いてやがる」

「っ——」

（カントを圧迫しないために選んだだけだ。そういう趣味じゃない。男の下着は縫い目が当たって痛いから——）

でもそんな言い訳をする余裕なんかない。指が、下着のクロッチ部分を撫で上げていた。

「ふっ……♡」

岩肌みたいにゴツゴツした指の腹が、薄い布越しに割れ目をなぞる。上から下へ。ゆっくりと。

「ん……っ♡ やめ……触らないで……っ♡♡」

「布の上から触ってるだけだろ。カントの形、はっきり分かるな。ぷっくりしてる」

「っ、言わないで……♡♡」

指が中央の窪みを探り当てて、ぐ、と布を押し込んだ。

「あっ♡」

反射的に腰が跳ねた。布越しなのに——指の硬さが粘膜に直接食い込んでくる。岩盤を何年も削り続けた手だ。普通の男の指とは違う。角が多くて、節が太くて、触れるだけで角質のザラつきが肉にめり込む。

「そんなに跳ねんなよ。まだ触っただけだ」

「だっ……て……っ♡♡ 硬いっ……指、硬すぎ……♡♡」

「鉋夫の手だからな」

悪びれもしない声。パンツのウエストに指がかかった。

「待っ——」

するり。降ろされた。

坑道の冷気がカントに触れた瞬間、全身に鳥肌が走った。秘密の、誰にも見せたことのない場所が——暗い穴の底で、剣持さんのヘッドライトの光に剥き出しにされている。

「——見ないでっ♡♡ お願い、見ないで……っ♡♡」

「見る」

短い一言だった。光の角度が変わる。額を少し傾けたらしい。楕円形の黄色い光が、僕のカントの真上からぴたりと落ちた。

「綺麗なまんこだな。触られたことねえだろ」

「そんなん……♡♡ まんこって……言わないで……っ♡♡」

「まんこはまんこだ。お前が男のつもりでいようが、ここはまんこだよ」

指が、直に触れた。

「んっ♡♡♡」

ザラついた親指の腹がクリトリスの上を横切る。たった一回、軽く撫でただけで——膝がかくんと折れかけた。

（な、に……これ……っ♡♡ 自分で触った時と全然ちがう……っ♡♡）

触ったことくらいはある。お風呂で、こっそり。でもこんな——こんなにガツンと突き抜ける刺激じゃなかった。自分の指は柔らかくて、どこを撫でてでも鈍い熱しか返ってこなくて。

この人の指は違う。硬い。粗い。指紋の一本一本が凶器みたいに粘膜を引っ搔いていく。

「あっ♡ あっ♡ やっ……♡♡ そこ、ゴリゴリしないで……っ♡♡」

「クリ、もう膨らんできてる。小豆みてえだ」

親指がクリトリスを捕まえて、ぐりっ、と押し潰す。

「っぴおっ♡♡♡」

腰が落ちた。壁に手をついて辛うじて立っているけど、膝はもう笑っている。剣持さんの左腕が腹に回って支えてくれなかったら、泥に崩れ落ちていた。

「立ってろ。まだ終わってねえ」

「む、むり……っ♡♡ 脚が……っ♡♡」

「じゃあ壁に抱きつけ。手を離すな」

言われるまま、冷たい岩壁にしがみつく。指が割れ目に沿って降りてきた。クリトリスから、ゆっくりと——。

「ここが入り口か」

中指の先が、カントの窄まりに触れた。

「やだっ♡♡ そこはだめ……っ♡♡ 入れないで……っ♡♡」

「濡れてる。お前のまんこ、もうとろとろだ」

指の腹がくちゅ……♡♡と窄まりを押し広げる。自分の身体から漏れた卑猥な音に、頭が沸騰しそうになった。

「っ……嘘……♡♡ 濡れてなんか……っ♡♡」

「嘘じゃねえよ。ほら」

剣持さんが指を持ち上げた。ヘッドライトの光の中に、透明な糸を引く中指が浮かび上がる。

「見ろ。お前の身体が出した汁だ」

「っ♡♡♡」

見たくない。でも目が逸らせない。太い指にまとわりつく  
透明な粘液が、ライトの光を受けてぬらぬら光っている。

——あれが僕の身体から出たもの。

「入れるぞ」

「ま、待っ——」

ぬちゅっ♡♡♡

「おおっ♡♡♡♡」

中指が根元まで沈んだ。カントの内壁が、岩肌のような指  
に一気に押し広げられる。

（いっ……痛っ……♡♡なのに奥からじゅわって……っ♡♡  
身体が勝手に受け容れようとしてるっ♡♡♡）

「きつつ。処女ってこんなもんか」

「っ♡♡ 処女って……言うな……っ♡♡」

「事実だろ。このまんこに指入れたの俺が初めてだ」

指が、動いた。中をぐるりとなぞるように回転して、膣壁  
の襞を一枚一枚、指の腹で踏み潰していく。

ずちゅ♡ずちゅ♡ずちゅ♡

「うあっ♡ あっ♡ あっ♡ 硬い……指が硬くて……中を削られ  
てるみたい……っ♡♡♡」

「鉤脈を掘り当てると同じだ。柔らかいポイントを見つける  
まで全部触る」

指先が膣壁のある一点をこすった瞬間——。

「びっ♡♡♡♡」

全身が、びくんっ、と跳ねた。壁にしがみつく指がずるっと滑って、岩の突起に爪が引っかかる。

「ここか」

「やっ——♡♡ そこ、だめ——♡♡♡」

「鉤脈、見つけた」

ぐちゅ♡ ぐちゅ♡ ぐちゅ♡ ぐちゅ♡

集中的に、何度も何度も、指の腹がその一点を擦り上げる。ザラついた指紋が柔らかい脛壁の突起を容赦なく抉って——。

「あっ♡ あっ♡ あっ♡♡ おかしくなっ……♡♡ そこ擦られると頭がっ……♡♡♡」

「いい反応だ。坑道中に声が響いてる」

——本当だった。自分の喘ぎ声が壁に跳ね返って、あちこちから降ってくる。まるで何人もの自分が同時に犯されているみたいで——。

「おおっ♡♡ 声がっ……♡♡ 反響して……全方向から聞こえ——びんっ♡♡♡」

二本目の指が押し込まれた。

「おうっ♡♡♡ ひろ……っ♡♡ 拡がって……っ♡♡♡」

「二本入った。処女にしちゃ上出来だ」



二本の太い指がカントの中で開いたり閉じたりを繰り返す。そのたびに膣壁がぐにぐに引き延ばされて、奥から湧き出る愛液がぬちゅ♡ぬちゅ♡と音を立てた。

（男なのに……っ♡♡ 男なのにこんなところを指でかき回されて……っ♡♡ 気持ちいいって思っちゃってる……っ♡♡♡）

認めたくなかった。この身体のまんこが快楽を感じていることを。男として二十四年生きてきて、ずっと無視してきた器官が——今、知らない男の指二本で痙攣している。

「もういっちょ。三本目いくぞ」

「むっ、無理っ♡♡ 二本で精一杯——おおっ♡♡♡」

ずぶっ♡♡♡

三本目が容赦なくねじ込まれた。カントが悲鳴を上げるように締まって、でもすぐに愛液が溢れてぬるぬると受け容れてしまう。

「入った。三本目。……お前のまんこ、きついけど従順だな。拒否してるのは頭だけで、ここはもう俺の指に馴染みたがってる」

「ちが……っ♡♡ ちがう……♡♡♡」

ぐちゅ♡ ぐちゅ♡ ぐちゅ♡ ぐちゅ♡ ぐちゅ♡

三本の指がカントの奥を挟りながら、親指がクリトリスを同時に転がす。上と中を同時に攻められて——涙が零れた。

「ひぐっ♡♡ あっ♡ あっ♡ あっ♡♡ なにか……来るっ……  
♡♡ お腹の奥から……なにか——っ♡♡♡♡」

「イきそうか。イけ。坑道に声を響かせろ」

ぐちゅんっ♡♡♡

三本の指が鉦脈を挟り上げると同時に、親指がクリトリスを弾いた。

「——っ♡♡♡♡♡ おおおおおっ♡♡♡♡♡♡」

膝が砕けた。がくがくと痙攣して、壁から手が離れて——  
剣持さんの腕に受け止められた。カントが指をぎゅうぎゅう  
搾って、愛液がびちゃっ♡♡と太腿の内側を伝い落ちる。

初めての絶頂だった。

（しらなかった……♡♡ 自分のまんこが……こんな声上げて、  
こんなに痙攣するなんて……♡♡♡）

「ははっ……♡♡ はっ……♡♡ はあ……っ♡♡」

「いい声だった。坑道の奥まで響いてったぞ」

絶頂の叫びが遠くからかすかに返ってきた。反響が消える  
まで何秒もかかる。

「……さて。ここからが本番だ」

「え……っ♡♡」

指が抜かれた。代わりに、衣擦れの音。ベルト。ジッパー。

剣持さんの光の中に——太く反り返った肉棒が現れた。

「ひっ……♡♡ うそ……っ♡♡ そんなの……指三本よりずっと……っ♡♡」

「鉦夫の身体は全部デカいんだよ。チンポもな」

怒張した先端が、膝をついた僕を見下ろしていた。血管が幹のように浮き上がって、ヘッドライトの光を受けて脈打っている。

（指三本で限界だったのに——♡♡ あんなの入ったら……壊れる……♡♡）

「む、むり……♡♡ 絶対むり……っ♡♡ 入らない……♡♡」

「入る。お前のまんこはさっき俺が開発したばかりだ。まだ柔らかい」

作業着の上着が泥の上に広げられた。その上に仰向けに押し倒される。ジーンズと下着は足首から引き抜かれて、下半身がライトの下に完全に晒された。

「やだ……っ♡♡ 明るいところでそんな格好……っ♡♡」

「明るいつつっても俺のライト一個だけだ。でもそれで十分だ。お前のまんこが全部見える」

脚を掴まれて大きく開かされた。絶頂直後のカントが、充血してとろとろに蕩けた状態で、光の真下に晒される。

「いい眺めだ。処女イキしたまんこがぱっくり開いてやがる」

「見ないでっ……♡♡♡」

先端が触れた。